

ハイジャック蜂起から解放されるまでの機内状況と出来事

① ハイジャック犯の蜂起

4月5日、私を乗せたクウェート航空機は定刻3時半にタイ国際空港（当時はドンムアン空港）を離陸。

離陸後すぐに始まった機内食（夜食）のサービスを受け、まどろんでいた。

（私の席はビジネスクラスキャビンの右側・後方、そのとき、問題のクウェート王族の3人はその上階のファーストクラスキャビンに居たことは、後で知った。）

つんざくような悲鳴、そして上階ファーストクラスキャビンの階段から転げ落ちて来た男性乗務員、うつ伏せに倒れ、荒々しい息使いとうめき声、口と鼻から流れ出て、床に広がる鮮血。

ただならぬ様子に目が覚めて身構える。

前方のスクリーンは、先ほどまでのニンジャ映画の上映を終え、当該機の位置をアラビア湾上空の西側に示していた。

そして上階から足早に降りてきた複数の人影、手には拳銃を持ち、銃口を向ける。

その時から全員ホールドアップとなり、私もこれに倣う。

アラビア語らしき言葉が発せられ、女性乗務員も空いた客席への着席を命じられた。

私の一つ隣の席に座らせられた女性乗務員と目を合わせた。

その目に「ただならぬことが起こってしまった」ということを互いに暗黙したのだった。

犯人らは、両腕を伸ばし引き金に指をあて拳銃を握りしめ、乗客の行動を威嚇する。

沈黙が流れる。

犯人が構える拳銃の先端もかすかに震えていた。

こういう画面を何かの映画でみたことを思い出し、記憶を辿っていた。

「その中の出来事なのだ」と、これを見る映画館の客のような錯覚にとらわれ、何故か恐怖はなかった。

むしろ、この経験をしっかり脳裏に焼き付けておこうとする自分があったように記憶する。

こうして始まったハイジャック事件であった。

② パスポートのチェック

人質全員が機体後方に集められ着席させられた。

乗っ取り犯は「American Passport !!」と、怒鳴りながらアメリカ人を探していた。

そして乗客全員にパスポートの提示を命じ、これを一人一人チェックしながら、取り上げていった。

日本はアメリカの同盟国である。その敵意は日本にも向けられ、危険な事態になるのではないか。

同じ時期、に起こったハイジャック事件でアメリカ人乗客が殺害され、その遺体が機外に投げ出されるテレビニュースの映像が脳裏をかすめる。

私の番がきた。

ジーンズ姿の長身で細身の青年が私のところにきた。

差し出した私のパスポートと私を見て「オージャパニー（アラビア語読み）」と、大きな声を上げ、親しみを込めて、にっこりしたのだ。

張りつめた緊張が一気に緩んだ瞬間であり、その、まだ少年のようなあどけさえを残す青年の表情を今も鮮明に記憶する。

この青年は、その後、乗っ取り犯全員が覆面を着用するようになってからも、そのジーンズ姿で認識が出来、あとになっても、その姿を追う、気になる存在となっていた。

③ 緊急着陸

機体は下降を開始し、ホールドアップの姿勢は、シートベルトを着けたあとも続けさせられた。

タッチダウンしても、どこに着陸したかは全く分からない。

プラスチック製結束バンドで満杯の段ボール箱が取り出された。

犯人らは、男性乗客全員の両手首をこれでしっかり固縛して回った。

動かせば結束バンドが肌に食い込み痛くて赤くなる手首を見ながら、「人質になってしまったのだ」という現実を悟り、無念さがこみ上げてきた。

ここで犯人らは（ピローケースに両目を切り明けた）覆面を着用し始めた。

不気味な姿に変わった犯人たちの様相は、さらに機内の空気を重苦しいものに変えた。

このあと、朝食のサンドイッチと水が提供され、犯人が、各テーブルに配った。

サンドイッチの包装に「Iran Air」のロゴを見つけ、ここがイランのどこかの空港であることを知った。

食事のとき、手枷（てかせ）をされて動きが不自由になった我々男性を、女性たちが、かいがいしく手伝ってくれた。

そして、何も起こらないまま、夜になった。

乗客のなかに、犯人に刃向う危険分子がいないことを見定めたのか、男性乗客の手枷が解かれた。

④ 妻や恋人との別れ

客室の空気がにわかに動きだし、女性乗客は解放されることになった事を知る。

乗客の多くがイギリス人であることは、犯人がパスポートをチェックするとき、これを見ながら「English」との呟きが圧倒的に多かったことで推測され、その殆どが観光客でもあることは、恰好や、土産物の手荷物をみて分かった。

ロンドンからバンコクに行くのにクウェート航空を利用すれば格安で行けたのであろう。

クウェートは単なる経由地であり、その経由地へ到着する直前に、この事件に遭遇してしまったのだ。これら観光客の大半は夫婦や恋人どうしのカップルであった。バンコクでの楽しい思い出に浸りながら、遊び疲れた身体を座席に埋め、浅い眠りについていた。そして、その夢が突然の悪夢となったのだ。そこに、女性だけの解放が告げられる。その別れが、カップルにとっては永久の別れになることもあり得るのだ。あちこちの席で、カップルが立ち上がり、言葉を交わす。じっと見つめ合いながら抱き合い、唇を軽く合わせ、そして立ち去る。見ている私も当事者であることを忘れ、胸が熱くなった。その情景は、いつか見た映画のひとコマのようでもあった。

女性がいなくなった客室。
やさしさに包まれ、少し華やいだ雰囲気が一転し、生き苦しい夜が続いた。

⑤ 機体の滑走路移動と頻発する機内停電

翌日になっても、何も起こらない状態が続いた。
時のイギリス首相のサッチャー女史が、イギリス人乗客奪回を「テロに屈せず」の姿勢で強硬突破を主張するのでは、と妄想もした。
もし、強硬突破があったら、どうやって身をまもるか、どこに伏せるかと、考えたりもした。
前席背面ポケットに非常口からの脱出方法が書かれたカードがあり、これを何度も何度もチェックした。
あのハンドルを回せば、非常口の扉は開き、そこから脱出出来る、と真剣に考える自分に、ハットしたこともあった。
窓のシャッターは閉ざされ、外の状況がわからないものの、滑走路を移動する動きが何回となくあった。
管制塔からの離陸の許可を待つような静寂が続いたとき、このまま離陸して、どこかに飛び立って欲しいという願いにも似た気分に襲われる。
何も変化がないことへの恐怖がつのる。
そして、時折、機内のブラックアウトがあり照明は消え、エアコンも止まる。
そのなかを、懐中電灯を手にした犯人が見回り、その光を顔面に当てる不気味さ。
また、突如として機内の非常ベルが鳴り響く。
これらは、機内への外部供給電源の切り替えによるものであろうと推測はするものの、心やすらかではない。
こんな暗い気持ちになったときは目を瞑り出来るだけ眠るようにしたし、実際よく眠った。

⑥ 遺書を書く

家族や肉親に向けての遺書らしきものをしたためたのも、こうした時間を過ごしながらであった。
機内誌と共に前席背面ポケットに入っていたクウェート航空機の絵葉書、この狭い通信欄に書いた短くて拙い文章は、今も残っている。
記載日時は 4/ 6 18 : 45 (日本時間) となっており、() 内に日本時間を書いているのは日本での皆の様子を思いながら書いたからである。
内容は「この先どうなるかわからないが、とにかく万が一のことを覚悟して……」、と、敢えて深刻に考えないように努めた。でも、書きながら、いろいろな思いが交錯し、頬に伝わる涙を禁じ得なかった。
乗っ取り犯から、乗客の筆記作業は、人質どうしの会話と共に禁じられていた。
もし、みつければ、銃口が向けられることは必至であり、この短い文を書くのも、見回りの目を盗んでの作業であった。

⑦

⑧ 解放のとき

この日も夜がきてさらに日を跨いだ日付(4月7日)となっていた。

“You are leaving now (今から解放する)”

この言葉が寝ていた耳元にささやかれた。

手荷物をまとめた乗客は、機体前方キャビンに集められた。

リーダーとおぼしき人間が、コックピット室を後ろにして分りやすい英語で皆に向かって話を始めた。

“We are deeply sorry (皆さんには非常に申し訳なかった) ……”

「今から解放されるのだ」という高ぶった気分のなか、謝罪の言葉から始まるこの演説に、皆、聞き入った。

演説は続き、仲間の解放のため、今回の行動に出たこと。そのために、関係のない乗客を巻きこんでしまったこと。さらに、預けた荷物のことにまで言及し、「必ず当航空機の最終到着空港より、皆さんの自宅に届けるようにする」とまで話があった。

そして、最後にまた、“We are sorry ……”で締めた。

このとき、期せずして乗客から拍手が沸き起こり、その中からは“Thank You ……”の言葉まで発せられたのである。

ハイジャック犯が蜂起して丸2日たった。

最初是人質と乗っ取り犯という関係であり、彼ら自体も人質となった我々の存在を恐れていた。

それでも、人質の中に、彼らに刃向うような危険分子がいないことが分ってくると、トイレにいくにも不自由であった結束バンドでの手枷(てかせ)も、やがては解かれた。

この閉鎖された空間を丸2日間共有し、言葉は交わさないまでも、ある種の連帯感にも似た空気が醸成されていたに違いない。

これを「ストックホルム症候群」と称するものらしいが、今思い出しても妙なものであった。

かくして、乗客一人一人タラップを降り、機外の人となったのだ。

外気は冷たいが新鮮だった。

歩く先のはるか向こうには、軍隊と思われる車列とヘッドライト。レッドライトが回る救急車。
やや歩き、そっと振り返ると、内部のライトだけがこうこうと光り、凍りついたようなジャンボジェットの巨体。

そして、空を見上げれば、満天の星。
「これで自由になれた」、言葉では表せない感動、脱力するような快感と幸福感、一生忘れられない夜となった。

(注 1)

このとき当該機には、まだ 3 人のクウェート王族を含む乗客・乗員 56 人が機内に人質のまま拘束されていた。
そして次の寄港地キプロスでは、この中の 2 人のクウェート人乗客が見せしめのため殺害され、遺体が機外へ放り投げられるという悲惨な出来事も起こっている。

(注 2)

この後、解放された我々非クウェート人乗客は、先に解放されていた女性乗客らと合流、マシュハド市内のホテルに宿泊。
翌 4 月 8 日の夕刻、クウェート政府が手配したクウェート航空の特別機にて全員共にクウェートに移動した。